
なにも見えない.....

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なにも見えない……

【Nコード】

N7710E

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【どす黒ホラー/サスペンス/全3話】 なにも見えない。見えなかった。暗かったせいだったと言いつを残して。これから夜が明ける。空暗さは薄くなり明けていく。さあ、快樂の始まりだ
『夏ホラー2008百物語編』企画参加作品 第3弾。怖さとは？

夜蝦墓（前書き）

普通に、人間を、書く。

コメディ禁止。規制かけても構わない（くらいの気持ち）。怖さとは何だ。

そんな条件下で出来た作品。笑い禁止かぁ……（チツ……）。
作者、ポケッツコミをとられると絶望的。

夜蝦蟇

『起きてますかあ？ 今夜もオールナイトでイッちゃうよよん。さてさてさて今夜の1曲目は何ぞ……』

見えないラジオパーソナリティが夜を盛り上げようと陽気に頑張ってくれている。

それを片横で耳に入れながら、大型トラックも軽貨物自動車も。トンネルや田畑の間を点々と秩序よろしく並ぶ外灯に誘われて、整備された道を道なりに進むのみで ある。

森下西部広域農道と呼ばれる、県道と県道を結ぶ農業用の道路があつた。まだ去年に開通したばかりで、地元の間も客も あまり利用は していない。しかも区間は山間地を縫っている所がほとんどのため、信号は全く見当たらなかつた。

緩やかに道路はカーブを描き、琴原 賢次の運転する普通車は真夜中に制限速度をとうに超えて駆け抜ける。

へん、どうせ誰も通っちゃいねえよ、こんな田舎道。見晴らしがいい広い道だしな。ヒック。

それが彼の下した間違つた自己判断。しかも飲み屋から出た帰りで酔いは覚めきつていないという。

今年28才に なる氷菓子企業 勤めの男で、部署は営業宣伝部だつた。

たまにモテる。

『……ザザ……誰も聞いちゃいねえよ……ザザ……』

山道だからラジオに雑音が混じる。たいして聴いては いなか

つた賢次は大あくびをした。眠気まで何だコノヤロウと天下り降臨し、彼に付き添い纏わりつく。前方の視界に見えるは右カーブで、大きく山裾は曲がりくねって続いているのが見てとれて、彼はしつかりとスピードを緩めていった。

「イツツマイ、ラ、イ」

もう一度 言うが、酔っている。声の調子が外れても、車内には彼一人しかいないので問題は ない。構わない。

構わない、が。

ドンツ。

「ふ？」

……。

左側の前タイヤに衝撃を感じた。

鈍い音が確かに聞こえた。気のせいにするには明瞭で大きな音。

ちょうどカーブが終わり、しばらくは真っ直ぐな道が続くだろうと予想される所で だった。

「……………」

無言。表情の ない賢次はアクセルを踏む事は なく。ブレーキを強めに踏み、落とし続けていたスピードをさらに落とし続けて、ついには停まるに至ってしまった。

自動車の教習所ならば満点をとれるほどの完璧に落ち着いた待避所への進入停車で、彼は草木の においが濃く漂うなか、億劫だなと言わんばかりに気怠そうにドアを開けて……………降りた。

周りには誰も いない。1台も車両は通っていない。

ゲエチヨ ゲエチヨ ゲエチヨ ゲエチヨ……………

ジー……………ジー……………。

辺りでは、そんな音が する。

フン……種も わからない虫どもの雄たけび だけだ。勇ましい
叫び声。何を言っているのだから、人間の俺様には わからんな。は
は……

本当は蛙とセミの正体も種類も普段は言える彼だったはずなのだ
が、ご覧の通りに冷静さを見失っている。だが それは表からでは
見えぬ事。見える彼の姿には動揺は ない。装いが平然と してい
る。

赤めの光を放つ外灯に照らされている地面を目と歩幅で追い続け、
車で進み来た道を一心不乱に生ける屍のように辿って行く。歩みを
止める事を禁じられていても、とれた。

呆然と、ただ ひたすらに……。

やがて彼の目撃した それが、皮肉にも彼を駆り立てて生気を与
える事と なった。

あ、る。

小さな毛皮が、片側車線上を横切る方へ向いて落ちている……い
や、倒れている。外灯が照らす地面の光と光の隙間に もさり……
と。

こちらから見えたのは背中だけ。暗がりだったが恐らくは褐色の
体毛で、体長20センチくらいで ある。ダラリと四股や体を伸ば
しきり首も反り返り、異物を吐くような格好で それは あった。
いや、何かを吐いている。

イタチ……だ こいつは。小せえから雌……だな。

何だよ……人間じゃねえ、のかよ……ビビッ……た……。

田舎では山や野でイタチが散歩していても それほど珍しくは

ない。賢次は額の冷たい汗を腕で拭った。それから彼の口元の締め
り加減が ほころびる。

犬でも猫でも猪でも なく。自分が車で はねたか轢ひいたのは、
イタチ。気味は悪かったが、人間では なかったと わかっただけ
で彼は充分に満足だったのだ。

へへへ……こつ見えても奴らは自分より大きなウサギや鶏も食べ
ちまうんだぜえ、ひひひひい……

わかった途端、賢次は不安解消の反動が愉快的な気分になつた。
どうだ、俺の大笑いを聞いてみないかと気持ちの高ぶりに のつて
抑えきれない。

彼は車へと足先の方向を変えて元気に歩き戻る。来た時とは対照
的に、時々小走りさえして闇よがまの中を。夜蝦蟇よがまの聲が騒々しく追い立
てている。

なにも見えない。見えなかった。暗かつたせいだと言いつを残し
て。

これから夜が明ける。空暗さは薄くなり明けていく……。

……

夜が明ける前に。

山間部からは遠く離れ、大学や研究施設の密集している地と緊密
な関係で工業団地がある所。

工場などをチラリと覗けば人の気配は無にも等しく。機械の稼動
音が所どころに響き、また響き、夜の空気の静けさを、感情 無く
静かに破壊し続けている。本当は、内部をちゃんと捜せば人が居る
だろう。鼠も何処かに潜んで息をしているだろう、と思われた。

だが夜は不思議だ。日が無いだけで こんなにも隠されてしまうとは。……

敷地内の一角に……寂しげに設置されていた雨水貯水用の大型タンクがある。角型で、蓋の開け閉めなど容易で、運搬用としても機能できるタンク。その中に。

女が、ひとり。

雨水は少ししか溜まって いないが、女の頭は底へと体ごと飛び込むようにして静止している。

ほんの数分前なら、生きていた彼女を見る事が できただろう。

しかし もう手遅れだ。遅すぎた。

呼吸を許さない水溜まりは、彼女を別の世界へと連れて行った。

さあ行け 行くんだ 行きなさい 行けよ 行け、行け、行け、い
けけけけけはあああああ。……

彼女は朝に発見される。

靴下

賢次は奇妙な夢を見る。

酔っていたとはいえ。ちゃんと一戸建ての自分の実家へと辿り着き、車庫幅に従い後ろ向きで駐車を終えた後。普通に車から降り、普通に手には忘れず鞆などの荷物を持ち、普通にドアを閉めてロックして、普通に玄関から入って帰宅した。

普通に……着替えず靴下くつしただけ暑いからと脱ぎ捨てて寝室のベッドに倒れ込んで寝てしまう。

そして奇妙な夢へと誘いざなわれる。……

「はあ、はあ、はあ……」
なにも見えない。見えない。見えない、『何か』に追いかけて。

「はあ、はあ、はあ……」
息苦しい。自分は走っている。ここは何処だ。何処なんだ。迷路、迷路なのか。スレートグレー、セピア色の壁が自分を挟み続いている。たつたつたつたつたつた。靴の音が響く……。

「は、あ……はあは……」
やがて足も腕も肩も背骨も呼吸も、疲れに疲れて限界を察知した。まだ行き止まらない続く道には申し訳ないかと、横の壁に体を許して倒れ込んだ。

ばん、そしてズルズルと、肩を引きずって沈む。足の格好などがぐちゃぐちゃだ。スルリと伸びた細長い両の足がスカートから……。

「……………」

頭の中が真っ白と化す。足の次に両手を自分の方に向けて見た。血色薄い白い手が、両の目の視界に入った。手術用の手袋でも被ったかのような細く、美しい汚れの無い綺麗な5本ずつの指……内に侵食して広がる違和感。

そして胸。衝撃を浴びた。

どうやら青の半袖シャツとキャミソールを着ているらしい自分の胸がふつくらと膨らんでいる。おかしい。何故だ。不思議が全身を包んでいる。好奇でまず触れて……押し揉むと確かに柔らかく『ついて』いる。

女だ。

女に なっているんだ。何故だ？ 何故、女なんか。

疑問は次へと送られた。

コッ。

黒エナメルの革靴と黒のスラックスを履いた足が影と一緒に自分の前へと現れる。

紳士 男物の革靴を履いた足は つま先を軽く広げて止まり、こちらが顔を上げるのを待ってくれていた。

暗い世界のなか両壁に挟まれ、さらに人物の影のなかへと隠れたこちらを見下ろし、相手は……その『相手』は……。

男。

恐れを感じた。「……」

黒の山高帽、黒のピーコート、黒のネクタイ、黒の……。

黒の……顔。

顔は？

顔が無い。

でも男だ。それだけは わかる。

しかし男の『白い』手が、こちらに向かって伸びてきた。「え？」

浮かび上がる手は、自分の頬や肌を優しく撫でるのかと思えた。思いたかった。だが。ぐじゆる。

一瞬、何が行われたのかを理解 出来なかった。それが『眼』だと認識するに至るまで、恐らくは13秒の経過。

次に『見え』た世界は違ったものだった。

あれ？ さっきの奴は何処へ消え……。

代わりに自分の目の前に居たのは、女。薄いピンクのシフォンのスカート、靴の片方が脱げ 白で こしらえたペディキュアのついた素足が見えていて、前開きにしたブルーのシャツの内からはキヤミソールを着た隆起した胸が見える。手足をダランと曲げ伸ばし、力無く壁に背中を寝預けて首が据わっている。

何処かで見えた覚えが。それも そのはず。つい今まで自分が見た、自分が していたと思わしき服装では なかったか。

何故 視界に あなたが映る。自分は誰、何。

今の自分は。

女の髪に隠れて見づらかった表情を見ようと関心を向けた。そして驚き叫びを。

うわあああああ！ ……あれ？ 声が。

そう。声は発しない。発せられるはずがない。

何故なら自分は『眼』だけになってしまったのだから。

女は片眼を奪われている。

自分が眼だ。あなたの眼は自分で自分は あなたを。

やがて自分という『眼』は女に近づき、近づき……女の顔は色濃く その『片眼の無い顔』は脳裏に刻み込まれていった。ポツカリと空いた眼の穴には漆黒の闇が詰まっている。残された もう片眼

が自分を見つめている。その充分に交感神経を刺激された丸い瞳孔は散瞳され対象を捕らえて離さない。対象？

やめる……

声は出ていない。

自分の視界に『白い』手が映った。これは、あの『男』の手。男の手だけが登場し女に迫る。もしま。

あああつ……！

ぐぎゅるっ……ぐぐぐ……ズポ……り。

あああああつ……

たいした抵抗も出来ずに残っていた片眼まで。男は指を巧みに動かし反応の無い女から容易くたやすえぐり抜きとった。

痛い、痛い、痛いいいいい！

実際に痛みは感じていなかったのだが視界から意識が離れてはくれず。拷問のように感覚は縛られ全てを見る羽目となり、叫びは繋がらない。

最後に見たのは女の、両の眼を失った骸の顔。

微かに微笑……う。

なにも見えない……の、よ……

……

「はあ、はあ、はあ……」

何て最悪な目覚めだと。賢次は重い身をベッドから起こして肩で息を整えた。激しい動機と息切れはしばし治まらず、仕事机の上に置かれていた置き時計はさあ出勤しろと時間を教えてくれている

た。指し示す針の動きを見た途端ガリガリと頭を掻いて。賢次は昨夜、服のまま酔っ払って寝てしまった事などを思い出し、チツ、と舌打ちした。

シャワーを浴びた後、出勤時間までには余裕で間に合いそうな時間では あったが どうも落ち着かなく。身支度を終えた後は冷蔵庫から冷えた缶コーラを1本取り出しプルタブを上げて喉へと飲料を注ぎ込んだ。

暑がった賢次が旨そうに飲んでいる間、つけていたテレビではキヤスターが今入ってきたばかりのニュースを読み上げていた。

女子大生が工場の貯水タンクで水死体と なって発見されたニュース。

賢次はコーラを飲み終わるとテーブルに空きとなった缶を置き、テレビの電源を消したりリモコンをソファへと放り投げて玄関へと黒の靴を持ってズカズカと向かって行った。

外を出た途端、嫌な顔に なる。太陽光線が熱く、溶かされるなと賢次は流れてくる汗を憎らしく思った。

しかも さらに彼の機嫌を損ねる事態が。

何と、車のエンジンが かからない。

「ちきしょう！」

眉間に皺が寄せられる。何度やっても1回で すら かからない。悲運だった。

左手首で光る高級腕時計をひと睨みし、諦めて車を降りた。

怖い顔は崩さないまま、無言で車を見捨てて徒歩でと車庫を出た所で、だった。

「にゃあ」

1匹の白い猫が、車庫と賢次の前を横切ろうと現れる。

「ダメよシロちゃん。賢兄けんいは これから仕事なの」

続けて現れたのは、小花柄のチュニツクワンピースを着たガール

「系の少女……近所に住む女子中学生だった。よく賢次とは朝や、夜の犬の散歩で会う事が多い。

今は夏休みの真っ最中だった。

「じゃあな広美ちゃん」

腕に抱きかかえられた猫を見て、賢次は微かに口元をほころばせて路面へと出た。少女の傍らを素っ気なく通りすぎ、容赦なく日光で覆われた住宅と住宅の間へと。歩き出そうとした その時だった。

「賢兄い！」

名前を呼ばれて振り向いた。

何だ？ と首を傾げると、呼んだはずの少女は何故か はにかみながら上目づかいに賢次を見つめた。

「この前 賢兄いに もらったアイス……」 『たらこドーナツアイス』、美味しかったよ！」

照れ笑いをしながら、抱きしめている猫を もっと可愛らしくぎゅっと抱きしめる。

「そっか。また今度もらってくるよ」

賢次は言って、手だけを振りながら前へと急いだ。また、素っ気ない。

「賢兄い……」

少女の頬は ほの赤く染まる。暑いせいだけではないのは、すぐにわかる事……。

「……」

道先で姿が完全に消えるまで、少女は賢次の汗ばんだ背中を見つめていた。「にゃあ？」何も知らない猫は眠そうに、クリクリとした目で少女の様子を窺っている。

「……おつかい行こ、シロちゃん」

「にゃあ」

やがて、少女も歩き出す。賢次が向かった先とは反対の方向の、高台と なった坂道へと。少し進むと、開拓も利用も されていない山が見えてくるだろう。……

少女の背後に、派手な柄のシャツと短いパンツにサンダルを履いた……ひとりの男が ついて行った。

見せた白い歯は、並びが悪い。

……

片側に田畑、片側に家屋が並ぶアスファルトの狭い道路をつまらなそうに歩く賢次。蛙とセミが野の あちこちで自由気ままに独唱を。草は砂と土に交じって その生命を輝かせる。

かつては歩き慣れていた道だった。車の免許をとってからは、徒歩が少なくなっているのが当たり前。何年ぶりかの徒行に新鮮さまで感じてしまうというのは奇妙な感覚が した。

「暑いな……」

地面は太陽の光の施しを反射する。熱を与えられて冷たさなど忘れた。

賢次が あまりの汗の量に嘆いていると、ふと。足を止めた。

「……」

神社が あった。

小さな頃、よく友達と来て遊んだ思い出が多くある。

石段が長く上まで ずうっと続いていて辿り着くと赤い鳥居が大きくあるのだ。『森下神社』と鳥居の中央に書いてあった。

足を止めたのは、恐らく鳥居の横に あった お稲荷様の像が目に入ったからだろう。

そして深夜のイタチの死に様が記憶に鮮明に残っていた。消えてはくれない。

「ハ……」

軽く息を吐いた時だった。

「こんにちは」

後ろから、声を掛けられた。「ど、どうも」

慌てて振り向くと、居たのは巫女の格好をして具材の詰まったスーパーの袋を1つ提げていた成人女性だった。長い黒髪は、後ろにまとめている。

「あなた、つかれてますねえ」

巫女は ふふ、と笑って腰に手を当てた。楽しそうに賢次を見ていた。

心の中でコホン、と咳払いをして、この巫女にスマイルを向ける事にした賢次。

「まあね。アイスも今が売れ時ですから。おかげで仕事は残業が毎日と多くなってしまいましたってね……じゃあ」

よく笑う賢次は言うだけ言って、とっと立ち去った。世間話など している暇など ないと、周囲は思うかもしれない気忙しい人間、質を持った男。賢次とは。

遠く小さくなっていった賢次に、巫女は立てた指を振りながら数を数え出していった。

「何人の女に『憑かれ』てんだらう。女が ひとり、女が ひとり、女が ひとり……」

ひい、ふう、みいと数えていって。あれ、……と首を捻る巫女。そして こう言った。

「けものが ひとつ……」

会社にて。賢次は夕方の方の5時を過ぎても残業を覚悟し、机の上のパソコンに向かって書類と画面を交互に目を配らせ没頭していた。クーラーの効いた室内では、他の社員達が我も我もと立ち上がり身辺を片付けて去っていく。

その中の ひとりが机で固まっている賢次に話し掛けた。

「私も残りますよ、よかつたら」

肩を叩かれて顔を向けた賢次は首を振る。

「いや。結構だ。女性を夜遅くまで引き止めるわけにも
いかないから」

また机の上へと意識は返ってしまった。

女性社員達は賢次の見えない所で きゃあ きゃあ騒いでいる。

賢次の株は着実に少しずつ上がっていった。

……

そして誰も居なくなつて、手がけていた作業が一段落した頃。「
さてと……」

本日は歩きと交通機関を利用しての出勤だった。ああ そういえ
ば そうだっけと会社の窓から見える夜の黒とビル窓の照明の光を
ぼんやりと見た。

集中力の途切れた頭は疲れたとみて、考える事を疎かにしていた。
会社から出て電車に乗るまでの間の道のりが、何と長く感じる事
か。賢次は1か2度ほど、普段は優にかわせる自転車や通行人に
当たりそうになつてしまつて何とか避けた。あまり疲れたとは本人
が感じては いないが、行動には現れている。

電車に揺られ、駅に着き、さて後は歩いて家まで、と駅の改札を
出た所までだ。

「賢兄い！」

元気な知っている声が した。

賢次を気軽に名前と呼んでいる唯一の人物。広美は朝に会った格
好、小花柄のチュニックワンピースを着ていた。同じく白い猫を抱
えているが飼っている犬は居ないため、今日は散歩では ないらし

い。

そう推察した賢次は、「何でここに？」と眠そうな顔を悟られまいと押し隠して聞いた。

「そろそろ帰るかなあって。シロちゃんと一緒に来ちゃった」

エへへ、とペロリと舌を出しながら首を傾げる。さっぱり要領を得ない賢次だったが、ため息 混じりで。

「暗いし危ないだろう？ 家まで送っていくから。ほら、行こう」「うん……」

ざわざわ、ざわ。

駅の周辺は迎えの車やバス、タクシー、人と。皆は帰り掛け先を急ぎ、賢次と広美は 那の中に紛れて光の少ない方へと消えた。

消えたのではない。夜道を並んで歩いて行く……。

線路に沿って立ち入り禁止のフェンスが先の高架の橋まで並ぶ、古い舗装の道をしばらく黙って歩いていた。雑草が端の何処にでも大きく生い茂る。恐らく刈り取られてから少し時間が経っているだろうと思えるくらいに生えていた。

鈴虫の音が小さくも大きくも聞こえてくる。立つコンクリート製の常夜灯の傍では小さな虫がブンブンと。この一帯は工場が多いからか、人気は少なかった。

もう数分 歩けば、多少は賑やかな大通りに出る。

電車が1本、フェンスの向こう側で通過した後。広美は抱いている猫に話しかけるようで、隣に居る賢次に話を切り出した。

「あね、今度、おじいちゃん達のトコに行くんだけどさ」

モジモジと、手と手を擦りこす合わせる仕草が引け目を感じさせる。しかし賢次には まるで関心は なく、勝手に予測を立てて過ごしている。

……ああ、去年に亡くなった おじいちゃんの事だな。今度の

お盆の時に墓参りに行くのか。

「何か忘れてないかなあ……って考えたんだ。そうしたら、1個
思い出しちゃって」

「何？」

「賢兄いに、言い忘れていた事が あつてさ……」

言い忘れた事……？

賢次は肩を竦めた。何だろう、と。同時に、何か賢次の背後から忍び寄って来るような悪寒がした。無論、賢次が振り向きそのものの正体を確かめようとした所で実際には何も居はしなかった。鞆を持つ手に力がこもる。何だ、何を思ったのだ自分は、と……。

「賢兄い！ あのね……」

いきなり大声で呼んだので、ドキリとして自分よりも背の小さい少女……広美に注目する。何故か双方とも自然と歩みを止めて。

そして。

「……」

「……」

自然の流れは流れのままに。広美は……賢次に抱きつく。……
「！」

ポト。

賢次の手から鞆は重そうに落ちた。猫も広美の手から滑り落ちて
にゃあと2人を見上げている。

ガタタン、ガタタン、ガタタン……

側面のフェンスを越えて数メートルも行った先の電車は慣性が惰
性と言われる運動で夜のお客を運んでいく。

何だ これは……。

賢次には、予想できなかった事が起きてしまっていた。

「……ずっと好きだったよ……賢兄い……」

嬉々

消え入りそうな　か細い声音は賢次の胸で呟かれる。賢次は始めこの先どうして　よいのか全く見当が　つかなかった。

しかし　それも一瞬の、片時の間の事。

賢次の方が大人では　あつたのだ。悲しくも、すぐに答えは見つかる……。

「悪いけど……」

賢次の腕は2本あつても、片腕さえ広美に　まわされる事は　なかつた。

「悪いけど、付き合えない。」

……。

……無言の時間は過ぎていく。広美の小さな両肩が賢次の胸元で震え出すまで。

「どうして……？」

俯いたままで一向に顔を上げず、広美は精一杯の小声で訴えてみた。しかし賢次の下した判断が変わる未来など存在しない。

賢次は、黙っていた。疲れも　あつてか神経が麻痺していたのか　もしれなかつた。

「どうして……」

差し当たって理由が　あるわけでは　なかつた。返答に詰まる。

賢次が、この　まだ世の汚れも知らない幼き少女に　どう言い繕い傷つけず、事なきを得ようかと鈍い頭の中で試行錯誤の思案を続けていると。

リン。

(え?)

足元の白い猫を見下ろした。

今に聞いたのは、鈴の音。しかし猫に着いていたわけではない。
では、何なのだ。

「賢兄い……」

広美は香りのよい毛髪の中から顔を覗かせた。

血の涙を流し。「ぎゃあああああ!」

つう、と両眼から一筋ずつ、速さを違えアゴまで伝い模様のよう
に鮮やかに。

伝わった血は、広美から離れて地面へ 猫へと降りかかる。ポ
タ。ポタ。

「にゃあー、ご……」

猫の眼光は賢次に向けられていた。「離せえ!」

賢次が強引に広美を突き放し飛ばした。もんどりを打つぐらいの
勢いは あった。広美はフェンスへ。賢次は腰が抜けたような格好
になった。

フェンスへと背中を打ちつけた広美はズズズ……と、膝を曲げて
沈みかける。

「何で……?」

ざわざわと……生ぬるい風は広美の髪を顔に絡めた。

そして変貌……する。

本当に中学生なのか、だが　しかし少女の表情は大人びていく。濡れている。賢次の上に水が赤混じりに降りかかる。

毛深い白い赤い顔は血の涙をまだまだと流して舌なめずりを。

におい、触感、音……ああ……

ねえ、あなたを舐めても　いいかしら……？

唾液の付いた手は賢次の唇に。「うわあああああ！」

渾身の力で賢次は立ち上がった。訳の　わからない事を叫びながら、夜の道をどたばたと行儀の悪い玩具のように走りまわる。

何故？

何故、あの娘が　あんな。

賢次はガムシヤラに　ただ　ひた走った。

大通りに出て、わずかにジーンスヨップや電気屋といった商店が並ぶ道をも滑走し続けて止まらず突き進んだ。

賢次が通り過ぎた電気屋のテレビは、アナウンサーが報道を流している。

『女子大生　水死殺害事件の犯人の似顔絵を公開！』

そして公開された犯人の想像スケッチ絵の人物は、面影が迷惑にも賢次に酷似していた。

まだ別件が　ある。

今朝から今夜に　かけて。少女が　ひとり、行方不明だと。

写真も公開され、捜索に有力な手がかりを民間に求めている。誰か、誰か、誰か……。

少女の名前は広美という。

……

賢次は走って、走って、走って。……止まる。

「はあ、は、は、はあ……」

不規則で不器用な呼吸を整えようと。賢次は立ち止まった傍らの長い階段の石段の下段に、すがりつくように倒れ込んだ。後ろを気にかけて、誰も かれも追っては来ないのだと確認して やつと安心というものを手中に入れた。

呼吸リズムが定まってくると、徐々に先ほどの光景が鮮明に思い出されてくる。あれは何なのだと。「……」

夢の続きなのか。疲れのせいかな？

そう思う事で、見たはずの現実をねじ曲げようとしていた。そんな賢次の頭上……階段の上段から、気分を壊す明るい声が聞こえた。「こんばんは」

神経質に なっていた賢次は、激しくドキリとして すぐに声の方へと顔を上げた。

上から自分を見下ろしていたのは……朝にも挨拶した、巫女。片手には、身長くらいの長さの竹ボウキを持って。

「これは これは……巫女さん」

そこで初めて気がついたのだが、賢次の居る場所は朝に通りがかった森下神社だった。

「はい。これ どうぞ。貸してさし上げます」

「え？」

立ち上がった賢次に、巫女の持っていたボウキが手渡される。意図が さっぱり わからなかった。

「来ましたね。やつつけて下さい」

そう言っって巫女の見つめる視線の先を、賢次も追うと、だ……。

「あれは何だ……」

賢次が ぼやくのも無理は ない。

万人が万人、必ずや認めるはずだ。あれは異形だと。賢次の見たものは……。

体毛、毛深く白と鼠色で全身を包む。人の形だが、家の屋根に手が届きそうなくらいの大柄だった。しかし乳房が揺れて女、雌にも見える。頭部には1つ、2つと、もうひとつは、猫の頭だった。

体毛に紛れて人か けもの の顔は幾つも埋め込まれて全身についている。眼をえぐりとられた顔も多く悲壮な表情を浮かべていた。

手、足爪が長く黒く。蛇が数匹絡みつき、ハエが たかり、鴉か羽や足が、体肉に突き刺さるように生えている。……

あれは何という名の異形だ。名づけようのない化け物が、再び賢次を求めて やってくる。

何故に賢次なのか。

「あなたは、動物を一匹 殺しましたね」

巫女の音調子を下げた落ち着く声が賢次に問いかける。「どうぶ

……」

賢次はイタチを瞬時に思い出す。あれが どうしたと？ 巫女に目で問うた。

「その動物は あなたのせいだ。出来ず、仲間を求め、無関係なものまで引き寄せて……こうして恨みは形と なって生まれた。あなたに責任が あります。あなたのせいだ」

俺の……せいだ……と？ そんなバカな。

巫女の視線が痛く突き刺さる。いや、そう見ただけだ。巫女は笑いも怒りも していない。そりゃそうだ？ 何故 俺が怒られる

? …… 賢次は終いには大笑いをし出してしまった。

「ははははは！ …… アホらしい。たかだか動物一匹 死んだくらいで何が責任だ。俺の知った事かよ！ なあ巫女サン。責任つつたつて どうとれつつうの？ 教えるよ なあ？」

賢次の本性が見え始める。迫り来る化け物……無論、このままには しておけず。巫女は賢次に指図した。

「死にたくなければ、それで奴らを倒して下さい。そのホウキで」
ホウキ？ と賢次は さっき巫女に渡され握っていた竹ボウキを見た。

「あなたが刀と思えば刀に なります。さあ どうぞ。死にたくなかったら」

……

夜は昏間に見えたものを覆い隠す……

賢次の両の手に握り締められるホウキは穂先を空に。始め、ぶるぶると震えて。睨みつけるは真正面の敵だった。

賢次を捜して さ迷うのだろう、世には居るはずのない者どもの塊よ。埋め込まれた顔の中にイタチも居るぞ、そら賢次、お前が殺した けものが あの中だ、ひひ……

時折 吹く風は賢次に向かって そう唄う。とても意地悪に。救わない。

『異形』の生えた毛の腕は、爪を立て武器に賢次に襲いかかってきた ひゅん。

賢次は横へと素早く避けた。爪は鋭く地面に刺さり舗装をひび砕く。だが賢次の方が小柄な分、身は素早く動けるそうだ。反対に、異形の方は動作が遅く重く鈍い。

それに賢次が気がついた時に。賢次の顔や様相がガラリと変わった。

試しとホウキを上高く掲げて、異形めがけて一撃を振り落とすのだ。

ばしんっ。

キャワンッ。

何と高い声で吠えた。

ホウキの一撃は、異形の腹部と思わしきあたりに入った。防御する事などはなから考えてもいなかった異形は、賢次の攻撃を全て受ける事になる。これから……

ばしんっ。

ギャオッ。

低い声。

ばしっ。

キュワワンッ。

高い声。

犬のような鳴き方だ。

見間違いではなく。味をしめた賢次の度重なるホウキ叩きの連続した攻撃は、異形の大きさを縮小させていった。叩かれることにわずかだが、小さく、小さく、と。

何だ こいつ。弱えじゃん？ ……ひやは。

賢次の全毛体毛はゾクゾクとする快感で逆立っている。何もかもが吹っ切れて。もはや自分がホウキの巧手だと。

さあ何処に容れて欲しい？ 望みのままに従い必ず ご期待に答えますよ お客人。

ここか？ ここか？ それとも ここなのか？ どの肉だ叩いて欲しいのは。言ってみるよオラ。オラ、オラ、オラ。オラあ！

バシイイイインツ！

ギユワアアアツ……ア！ ア……

血が遠くへ飛んだ。

飛んだのは体も、だった。2・3メートルは軽く飛ぶ。「け、賢兄い……」

懐かしい声が異形から発せられ充分に聞こえたはずなのだが、賢次の耳に聞こえては。

バシイツ！

ホウキの穂先は容赦なく責め続け、

バシイツ！

もはや正しさも先に来るものも訳は わからなくなってくる。

バシイツ！

「ぎゃは……」

声を漏らした男は悦と楽を選び溺れ、

バシイツ！

自分を見失う。「もっと吠えろよ……」

バ……

キヤイ……

ともし つまみにでも思うのならば

「隠さない事です。始めから」

残念だが、巫女の肉声も賢次には決して届かなかった。

夜に浮かぶ月は闇を照らしても光り行き届く範囲には限度がある。

ああ……

なにも見えない。

夜は明けて……数日 経つ。

行方不明だった広美は、家の近所の公園で無残な姿で発見された。犯人は調べて すぐに割り出されて捕まった……暑い さなか、ムシクシヤしていたらしい。動機など、つまりぬものだった。犯人の男は身を隠さずテレビカメラの前で堂々と警察官や刑事に手錠をかけられ連行されていった。

被害者と なった広美の発見現場や詳細なども隠さず放送されている。

一方。

朝に。賢次は修理に出されて返ってきた車で出勤する。

排気ガスを撒き散らし、神社の前を駆けて行く。階段に居た巫女はホウキで掃き掃除をしていて、通過した車を運転していた者が

賢次だと わかった。

道の傍ら、そよ風に揺れる野花の所まで歩み出て しゃがみ、花を誰かにと例えて話し掛けた。

「あなたには見えない」

賢次の肩にはイタチが のっている。
しかし彼には自覚がない。見えていないのだから。
恐らくは一生、とり憑かれたままなのだろう。肩にのせて。そ
して また異形へと。

ずっと一緒に居る。嬉々^{きき}として戯れ一緒に。未来永劫、来世まで。

彼が真に心から甲う日まで。

ずっと居る。

ずっと……ひ、ひ、ひ。

なん どころ した の

《END》

嬉々（後書き）

【あとがき】

見えないラジオパーソナリティー 〃 作者という隠れオチ。

It's My Life

やっぱりツツコンでしまうんだなあ（ポリポリ）。

さてさて……

目次ページ・平（片）仮名 変換・並べてタテ読み。

ここまでのご読了、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710e/>

なにも見えない.....

2010年10月14日22時58分発行